

座談会：岡田武松先生をしのんで (I)

昭和31年11月19日岡田先生の追憶会が、日本気象学会と気象庁との共同主催で、第1部、第2部に分けて開催された。第1部は、畠山理事長の司会の下に開催された。主にお話し下さった方は、佐藤順一氏、奥山奥忠氏、国富信一氏、和達清夫氏、大谷東平氏、佃十吉氏で、最後に肥沼寛一氏、吉武素二氏が堀口由己氏宅に伺って来て来た堀口由己先生の録音による話を聞き、岡田先生を追憶した。つぎにのせる諸先生のお話は読者の皆様にも深い感銘を与えることと思う。第2部は午後5時から如水会館において和達長官の司会で、晩餐を共にして盛大に行われた。

(I) 佐藤順一氏の話

私はもっとも早い時からお世話になったものであります。まだ大分測候所に勤務中で、明治32年予報上のことで一カ月許り滞京した。その頃先生は大学を卒業予報課に勤務されて間もない頃であった。その頃の予報課は一室で一隅に和田課長、それから6人分の卓子がむきあいに並べてあった。岡田先生がその一隅を占めて就任後久しからず古い天気図につき高気圧と低気圧の進路を調査されていた。先生は予報課におられて気象学を講義されても天気図を引くことになると和田技師に批難され同室の馬場信倫、六笠弘躬がはるかに上手で課外にも中川源三郎、井口竜太の諸氏がその巧拙を批難するので天気図をひくことは学問でないと言われたことを覚えております。天気図も近頃は学問が加味され殊に渦動論に充足した数値計算に基いて図を引くようになりましたがSynopticalは元来鳥が高い所から見卸した図を描いて移動の見込から予報する外なかったからそのお話しも尤なことにならずに済んだ。それで先生の気象学は度々改稿詳説されたが天気図を引く学問はあまり詳説してない。岡田先生が自由に天気図を引かれたのはそれから2・3年後のことに思われますが確かなことは申されません。後には巧みに書かれ予報もうまくなされたが度々文人画の説明を聞かされた。ここに雨が降ってるからそこに低気圧をいれよう。この風が北東ではこの辺にもというのを度々承った。実にその手法が天気図となり予報の学問であった。

先生はその頃書物を買えないのが一番遺憾と申されておった。その時代には常用表、対数表、官報などは予算にあげてあったが本になると寄贈されたものは特別で一文の予算もないから自分で買う外なかった。気象の雑誌になると今ある英の Quarterly Journal of the Royal Met. Society も独逸の Meteorologische Zeitschrift とか Annalen d. Hydrographie u. Maritimen Meteorologie などもあったが予算がないから読みたけりゃ自分で買えとはなつけれられるので少ない給料から買う外なかった。これが気象台が時勢におくれた基だと幾度も奮慨して話された。その前後新進の学士が前後して入合されたが何分にも地位が低く薄給で学問の便がなく短月日ではげ出された。たとえば本間義次郎、平塚忠之助、友田鎮三、塩谷作兵衛、伊藤徳之助、掛谷宗六また外に今日となりては私共の記憶せぬ方も二三人あったと思いますが、いずれも永くはおられなかった。

その頃気象台には定員が仲々改められないので先生は学士でも判任の技手で7年間も辛抱された。それに比べると大石先生の入台は5カ月早かったので2年の後には技師(高等官)となられ、したがって給料も大変な違いであった。しかし財政不如意の内にも学問の研究に主力を注がれた。その頃先生は御母公と御夫婦それに甥子2人(郡司君がその一人)5人暮し官舎の事で家賃はいらないが買物は不便で随分高い品を買わされたものであった。それで先生はお酒がお好きで和田課長の御手引もあり何人かの悪友もあり深夜に及び吉田孫兵衛に厄介にされた話が度々であった。私はその頃酒にかけて豪の者であった。しかも酒にたおれたことがない。それでお供して今の神保町辺かを度々さまよったことを記憶しております。

ところが私が筑波山に転任しました何年かの後であった。先生から鹿児島に出張するというご通知を受けたので早速鹿児島の酒は強いから御用心肝要と親心で苦言を呈した。それに折返し禁酒しておるから安心せよと葉書を頂いた。その事情を承ると日射観測が元で「そこひ」にかかれ全然禁酒というので、それから2年3年6年にわたり河本眼科に通院加療遂に全快された。その禁酒久しい間の治療は殆んど想像も出来ぬ難事であったが、この禁酒加療の一事で82才の天寿を完うされた事を祝福します。藤原先生も豪い方であったが強い酒のため早くなくなられたことは遺憾であった。

先生が技師となられたのは日露戦役の始め明治37年7月28日で大石先生から6年もおくれておられたので中央気象台長の跡釜は大石先生と予想されたが大正9年8月気象台官制の改正に当り岡田先生は海洋気象台長に大石先生は高層気象台長に補せられたが同じ台長でも岡田先生は勅任に進まれ大石先生を凌がれた。その後4年にして中央気象台長に補せられ気象界の王位を占められたことは全く就任当初雄伏の賜であったと思います。要するに逆境に勉強されて、眼病に禁酒されず暇を苟もせず著述に努められたことで、あの大人物となられたと私見を述べて今日の追憶談といたします。

(II) 奥山奥忠氏の話

岡田先生に私がお眼にかかったのは、明治42年9月、私が中央気象台に赴任してからで、当時先生は予報課長の職にあり部下の佐木虎士、小松忠治良、重富剛策、山沢金五郎、吉川泰三、高山四郎等の諸君を相手に鉛筆を

手に天気図と首っぴきの執務状態に拝した。爾来昭和16年6月私が退官する日まで32年間事務遂行上で親しく教えを戴いたことが少なくない。先生も同年7月退官されたのでその後は中央気象台の会合あるいは岡田記念会理事会あるいは私が布佐や柏の研修所へお伺いして拝顔するのが常で、最近では7月29日和達気象庁長官と共にお伺いしてお話を承った。その時、先生は臨床してはいたものの莞爾として迎えられ、和達長官が気象庁に昇格したことを話されたら、非常なお喜びで気象庁になってよかった、よかったと繰り返され、いかにも育ての大きくなったようなお気持ちのように拝した。3人の話は約30分、拝辞に際しその内一度出京するからとの仰せだったので、その一日も早からん事を念願し、長官の令嬢と3人で先生のお言葉に甘え昼食の御馳走にあずかりお別れしたが、それが先生との最後になるとは夢想だにできなかった。ところが9月2日早朝突然岡田先生が亡くなったとの悲報に接し、茫然自失断腸の感だった。少なくとも米寿のお年まで生存して下さったらばとの念で一杯だった。先生は令夫人に先だたれ、晩年は不仕合せで、誠にお痛わしく御同情申上げていた。私は長年の間先生の側近者の1人として、先生の気象事業経営の計画に参与補佐に任じたので、先生が日本気象事業の根底を築き上げた重要な事績の中とくに力を傾注したと推察されるものの経緯など申し上げて、先生長年の御苦心と理念の程を新たに思い浮かべて偉大な先生を偲びたいと思う。

気象事業に対する先生の信念

先生は円満滑脱他人に敵対するような人でなかったことは周知の通りであるが、公務上のことに関し条理に屈れないことには絶対に屈しなかった。その1例をあげると、昭和13、4年頃よく某方面から気象業務上の措置につき種々の要求あり、甚しきは気象電報の直送の請求が極めて執拗だったが、需用のことは気象台の方から適当に処理するからと断固拒絶した。かかることから先生の身分にまで容喙されたことと、それを拒絶したことを主管庁から聴かされたことと先生から承った。威圧に屈せず職責を死守された毅然たる態度、剛復さは心強きものであった。先生はよく「今に日本は軍人で亡びる。」と云われたものだが、どうでしょう。今日の日本の現状は、先生の予言はあまりにも正しく的中し、最劣等国に叩きのめされた醜状さ。今後百年を経ても勢威隆々たる元の一等国に環元し得るだろうか。先生の烟眼と申すか先見と申すか真に驚歎している。大東亜戦前、企画院における気象審議会の関係で藤原技師と私は軍人連と企画院会議の帰途よくおそくまで気象台で話し合ったものだが、当時の軍人達は今日に至り、「あの当時はよく岡田さんに盾突いたものだが、やはり岡田さんは偉かった。」と述懐する向きがある。先生の没後気象庁の庁葬儀に参列した某元軍人は、「本日弔詞を聴き、先生の偉大さが一層わかった。本当に偉い人を失った。」と述懐した。

施設上の主な事項

先生の事業の経綸抱負は雄大で、測り知ることは出来ないが、私が先生に指示された建設的事項の主な数項につき、その経緯などを述べて先生を偲びたい。

富士山測候所と船津観測所

富士山頂で夏季中あるいは冬季短期間観測したことは既知の通りだが、現測候所設置の動機は昭和7年世界協同の第2回極地観測開始に端を發し、昭和7年7月15日より同8年8月まで13月間継続観測を果さなくてはならないので、昭和7年1月1日から観測を開始、その1年間の観測継続の成果が学術上、航空気象上、天気予報、暴風警報上、はたまた登山者のためにも極めて重要なことが判明し、岡田、藤原両先生はこの観測継続の決意を固め極年観測経費が尽きると、藤原技師は百万奔走の結果約1年間三井報恩会から所要食糧の援助を乞い、予算の空白中観測を継続し他面予算を要求して、その容認が昭和10年度から経常化し、両先生の苦心が実を結び常設となったもので、設置の最初から数年間、登山観測に従事した主な職員は気象技術官養成所卒業の菅原、淵、藤村、大和、山中、三宅等の諸君で、岡田先生自らえり抜きの斗士連で、これら諸君も絶対に継続を支持主張され、「旅費などはどうでもよい、われわれがやる」となかなかの元気であったこと、私は今でも忘れ得ない。諸君の意気を、ことに藤村都雄技官が爾来引続き25年の久しきにわたり脇眼もふらず若い諸君を率いて富士山測候所を一手に背負っていることは何と偉大な業績でしょう。岡田先生は君の奮斗を激賞することたびたびだったことをこの先生追悼の機に皆様へ御承知を願うものである。

序に船津観測所は山頂との比較観測と山頂交代員駐留のために施設したものだが、岡田先生はこの敷地を岩波茂雄氏に、宿舎を鈴木清二氏に寄附を懇情してできたことを附言する。

大島測候所の密附建設経緯

東京地方に襲来する暴風観測通報上、大島に測候所を必要とし、その設置予算をたびたび要求したが、たまたま藤倉電線株式会社社長松本留吉氏に大島に火山観測所設置の意があると、東京湾汽船株式会社社長林甚之丞氏が来台、岡田台長に相談されたのに始まる。松本社長が林社長に大島に火山観測所を設置する意向があるならばある程度の寄附をするからと、その斡旋方の申出があった。林社長はそれを東京大学に持込まれたが、話がまたらなかったと、岡田台長に來られたので、直ちに松本、林、岡田の三者会談に移り、私も加わり、四人再三会合を重ね、経常費は一切心配を寄附者にはかけないこととして測候所と山頂火山観測所および東京湾近海の海洋観測用小型観測船を設置することとして、金15万円を寄附することに話がまとまり、また敷地は元村と東京湾汽船株式会社の寄附方を林社長が尽力することとなった。これで先生多年の宿願が成り大満悦だった。庁舎、火山観

測室その他設備一切の設計を堀口由己博士に依頼し立派な測候所が出来た。

海洋気象台建設の経緯と大阪臨時出張所の設置

海上気象の通報は岡田先生が独自の創意で成り、海上気象電報式を自ら作られ、世界各国に卒先して明治43年5月1日から開始されたことは有名だが、先生はこの頃から将来海洋に関する専門機関をと虎視眈々機を狙いつつ建設資金の獲得の方途に心を砕かれたものではないかと思う。余談になるが、ここで私がかねがね推察していた先生の肚裏の程を少しく偲ばせて頂く。昭和7年9月に中央気象台臨時大阪出張所を設けたが、(昭和8年10月神戸に移転す)この設置の理由は関西西地方における気象通報の敏速を図り特に台風季節に暴風警報発布等に遺憾なきを期すると共に船舶の気象測器の比較調整をなすと云うのであった。これが先生の慧眼実に驚歎に値する遠謀だったことを窺い知る。かくして阪神地方民と大阪湾出入船舶業者の関心をかい気象の重要性を認識させる誠に巧妙な先手だったと推察される。この第一石を投じてからが問題で、目指すところは海洋気象台建設資金とその獲得方法にあったものと思う。資金は阪神地方の船舶業者に懇請、方法は上司文部省の諒解を得ることに決意されたものと見えて、当時の文部次官田所美治氏に赴き諒解かたがた船舶業者の援助方につき相談したところ、田所次官も快諾され、ちょうど学友清野長太郎氏が兵庫県知事だったから、紹介と特別の配慮方依頼の手紙をもらい、当時堀口神戸測候所長が知事と懇意だったのを幸いに堀口技師と図り、二人で清野知事を訪ねて快諾を得た。知事は阪神地方の主な船舶業者を招き懇談会を催されて海洋気象台設置計画を説明、その援助方を要請され諒解を得たので、堀口技師が阪神地方を大奔西走船舶業者を歴訪懇請の結果、相当の寄附金を獲得したので、堀口技師の努力を贅え居られたことを記憶している。堀口技師は懸命の努力で資金を獲得され、しかも神戸測候所構内に建設の建物の建築工事ならびに設備万端につき岡田先生を補佐されたのに顧みて、海洋気象台は岡田先生、堀口技師の合作と云ってもあえて過言ではないと思う。

かくてその庁舎官舎の設計と設備施設一切を堀口由己氏に依頼して工事に着手昭和9年8月25日に完成、事務を開始するに至り、同日中央気象台神戸出張所は廃止してその事務は海洋気象台に引継がれた。先生の初志全く成り御満足の程が想像された。序にこの経常費の要求に際し、先生も文部省員と大蔵省に赴かれ説明に当り主計局長西野氏が、「こんなものも1つ位はあってもよかろう」と云われたとにこにこ顔で帰られたことを思い、その時の御顔が彷彿たる次第である。西野主計局長が1つ位はよかろうと云ったのが、今日では4つ出来ている。先生の慧眼一入牙ゆるを覚える。

尙1つ私の憶測を述べさせて頂く。岡田先生は大学卒業と同時に中央気象台に入ってから約7年間技師の判任

官で過ぎ、藤原先生も大学卒業後直ちに中央気象台に入り9年間技師判任官の理学博士だった。もっとも東京高等師範学校の講師を兼任していたので、同校に乞い兼任の教授にして貰ったものだった。岡田先生は藤原博士が自分の逆境に処せし同じ境遇の久しきに同情され昭和7年9月大阪出張所の設置と同時にその所長に昇任されたことは先生の思遺りの1つかと思う。両先生が同じ様な境遇にそれぞれ雌伏10年の観あるも後年に至って断然頭角を顕わし、しかも前後して中央気象台長の職につかれたのも妙で何かの因縁でもかなと感ずる。

気象無線通信施設

大正12年9月1日の関東大震災のため、中央気象台有線電信業務が全く不能に陥ったので神戸の海洋気象台に一時予警報事務の一切を委嘱するのやむなきに至ったので先生は機を逸せず、中央気象台に気象通信専用の無線通信施設の緊要欠くべからずと直ちに庁舎の復旧と共に計画を立て所要経費を要求した所、幸いに容認された。その工事は大正13年12月完成し、14年2月10日通信を開始した。ついで石垣島、沖縄、名瀬の3測候所、さらに他の離島と漸次施設され今日の偉大な専用通信網を保有するに至った事は先生の慧眼と果敢の至す所と驚喜措く能わなかった。中央気象台の無線塔工事に当り通信省では施設の許可を請けなくて設備するの不法を責め工事の中止方勧告を受けたために後日施設認可申請に際し藤原技師が主となり私と2人あるいは曾我技師と通信省主務局との折衝上非常の苦境に処し時には文部省主務局の課長を煩した事など藤原技師の苦心は実に気の毒だった。このようにしてこの施設の認可を得、その通信開始があたかも日本気象事業創業半世紀満50年の幸ある記念すべき年に当るので気象事業創業50周年記念塔ならびに岡田先生記念塔と呼称することを念願する。

測候技術官養成所の創設

本所は大正11年8月の創設にかかり、岡田先生と藤原先生はかねがね測候技術官養成の急務を主張されていたが、藤原技師と私と2人で文部省会計課予算係長に面接し藤原技師より気象技術官養成の緊要急務なるを説かれたところ、係長も藤原技師の熱意と気象事業上の重要さを認識され即座に要求書を提出してみてくれとのことで、直ちに養成計画をたて要求したところ1回で大蔵省も容認された。いよいよ大正11年9月第1回生徒を募集したところ、わずか15人の採用に150人と云う10倍からの志願者で優秀な者を採用出来て愉快だった。大正14年10月を第1回とし爾來逐年卒業生を出し、これらの卒業者の多くは現に気象事業界の幹部あるいは中堅として大いに活躍し事業界今日の隆盛に寄与する頗る大である。岡田、藤原両先生は日夜これら諸子の薫陶と観測精神の涵養にとくに力を傾注され気象観測上特異の責任感に徹せる士を育成され、この観測精神を気象観測者の魂として気象界に植えつけた。これは両先生の遺物となり永久

に気象界人の体得し奮斗の基たるべく、その功績の偉大さ特筆すべきものであると思う。このようなわけで古い卒業生諸君は両先生に対し慈父の如き感を懐いているようである。

気象事業の一元化と殖民地観測機関の喪失

気象事業は明治、大正時代より昭和12年までは国立の中央气象台とその附属測候所、道府県立の地方測候所、私立測候所および国費支弁の台湾、樺太、朝鮮、関東、南洋の各庁の測候所があったことは御承知の通りである。これらの内、地方測候所は経費少く維持困難の理由で、補助金の交付あるいは国営移管方を全国気象協議会（中央气象台で3年毎に全国測候所長を東京に招集して開催したもの）で強調し、文部省に建議し、一方中央气象台では多年にわたり、地方測候所に補助金の交付あるいは所長を技師としてその俸給を国庫負担とするとか、あるいは全面的に国営とする等の計画で予算を要求したが、容れられず遺憾に堪えなかったが、昭和12年に海軍側から地方測候所現状と中央气象台間の事業上の連絡状況等につき承合があり、地方測候所の現状では気象業務上の需要完全を期待し得ず、平素中央气象台の主張する測候所の拡充強化は絶対必要なことと意見が一致した。

このため企画院の気象審議会に気象事業国営問題を提起し慎重審議の結果、昭和13、14年の両年度にわたり、全面的に国営することに決定し、文部省で所要経費を要求することとなり、かくして移管することとなった。遂に気象事業の完全な統制成り一大気象城壁が築き上げられ、先生の宿望達成し、さぞ重荷を卸された感懐なりしかと推測される。しかるに何ぞ凶らんやです。この後数年にして大東亞戦争と称するもの勃発し、結果は哀れはかなくも、岡田先生の予言通り、国は亡びて最劣等国に墜落すると共に、台湾、樺太、朝鮮、関東、南洋、各庁の測候所は全部喪失するに至ったことは痛恨の極みである。

結びの言葉

岡田先生の業績はまだまだいか程でもある事は皆様御承知の通りであるが、外のことは和達長官からお話しのことと思う。最後に

気象事業の根幹をこのように確立された誠に偉大な業績を将来永久に記念して後世の気象人に伝わるよう熱望する。それには岡田先生記念会一層の隆盛を図り、気象庁唯一の外廊団体として益々事業を推進しなお育英事業のみならず福祉事業や気象学者の研究調査発案等々の表彰あるいは助成にも力を傾注し得よう気象界皆様一層の御力を頂きたくって御願ひし、以上をもって私の先生を偲ぶ言葉とする。

(III) 国富信一氏の話

私は子供の時から岡田先生に御厄介になった、と云うのは私の伯父のところに岡田先生のお姉さんが再縁して

来られたのだ。それが明治43年頃だった。私が中学校を出て、父が実業家だったので実業方面に行かせられる筈だったが、それが気に入らないでぶらぶらしていた。岡田先生が私の遠い親戚になったので、中学校を出てから一日おきに先生の所に伺うようになった。その間に座談的に先生のいろいろな方面に接した。高等学校の時は岡田先生の命令で本多光太郎先生の下に3年間あずけられた。うんともすんとも云えなかった。その後群司君もあずけられ、2人ともひどい目にあったわけだ。（笑声）その後气象台に入り、一生先生のお世話になることとなった。しかしこの時の苦勞がどれだけ役に立つたことか。

先生の不思議なことは、先生に宿題を見てもらってから、こたつ等で雑談している時、先生は横文字の本を読みながら、われわれの話に時々台の手を入れることであった。ほんとに分っているのかと思ったが、後に先生の本を見て、それを知った。先生は本を大切にされて本に書き込むことを嫌われたが、紙をはきんでノートしてあったので、それを読んでわかった。

气象台のスポーツを初めてやったのは岡田先生だ。と云うと不思議に聞えるが、御自分ではラケットを持ったこともない。私は中学校から大学1年までテニスの選手をしていたので、テニスがうまかった。高等学校の時に、先生に「家内と一緒に買物に行ってくれ」と云われた。奥さんに聞いたら、「美津濃に行って、ラケットを買いましょう」と云うのでびっくりした。草ぼうぼうの広っぱをきれいにしてテニスコートにするのだと云う。草場茂登さん、藤原さん、今道周一さん等とコートを作った。これが气象台のテニスの初めである。つぎには野球をやった。野球をやった頃には、和達さんが入って来て、一方の旗頭で大いにやった。テニスは非常に強くなって安田銀行をストレートで敗ったことがある。（笑声）早稲田のナンバーズリーをやっていた選手を私がつれて来てコーチを頼んでいた。

震災の後は流言蜚語が飛んだが、その時ある宗教家が来て、近く大震災があると云う。そして宗教家の発表だけでは人が信用しないから气象台のうら書きが欲しいと云う。岡田先生は藤原さんの真面目な点を利用して藤原さんに頼んだ。藤原さんが会って、「その神様はどう云う神様ですか」と聞くと、「全知全能で出来ないことはない」と云う。藤原さんは「ああそうですか」と云って、計算紙を持って来て、「ここまで計算をやったが後がわからないので困っているので、これを解いて下さい」と云ったので、その宗教家はおどろいてほうほうの態で逃げで行った。岡田先生の人使いの旨いのは感心した。

明治27年に東京に強震があり、その後、しばらくなかったが、大正10年12月8日に東京附近に強震があった。地震係の中村左衛門太郎さんは洋行中でいなかったのので、柿岡の所長もしていた私は地磁気の専門でしたが、その代行をし、その他5つか6つの主任を兼任していた

た。私は地震の地も知らなかったが、石川さん佐藤さん等が主に仕事をやっていた。家へ帰ったら夕方に電話があって、「震源地は何処にしましょうか。大森式で円を描いて調べると震源地は霞浦になるのですが」と云う。それならそれを震源地として出しておくように云って寝てしまった。ところが翌朝になって警いたことには、新聞に大きく震源地争いとして出ている。片や大森博士の鹿島灘、片や国富技師の霞浦。びっくりして岡田先生に相談したら、「いいじゃないか相手は世界的な大物なんだから、敗けたって当り前、勝てば大したもんだ」と云われた。(笑声)

その当時の模様を述べると、気象台で集まった観測資料は電話で大森先生の所に送り、大森先生はこの資料で震源地を求め発表し、気象台にも知らせて来ていた。私はそんなことは知らないから、大森先生のところに資料を送らなかつた。そこで大森さんは待てどくらせど気象台から資料が来ないので、大学の資料だけで、震源地を求めた。方向は合っていたが、資料が少ないので、気象台で出したのと違ってしまった。今から考えるとやや深い地震だったのである。

岡田先生の腹では、地震観測は気象台でやっているのだから、大学で発表するのはおかしい。大学は研究をするところで、対世間の発表は気象台でやるべきだと考えていた。そのチャンスを掴んだのだ。震源地争いで、いい気持ちで、でくの坊になっていたのは私で、陰であやつっていたのは岡田先生なのだ。(笑声) 今村先生の代になってもしばらく震源地争いは続いたが、北伊豆地震でこれも終り、今村さんがお辞めになると同時にこの争いはなくなった。震源の測定では資料の多い気象台の方が正確だと言うことになった。

中村さんが帰られてからも、大地震の時は手が足りないので私がお手伝いをしたことがある。関東大地震の一週間位後に、私は先生に「柿岡はつぶれたらしいから調べて来い」と云われた。柿岡の観測所には石のドームがあり、その中にマグネトメーターが入っている。雨が洩るわけではないが、床に水がたまって、写真の感光紙が湿ってしまうし、高下駄をはいて入る程であった。ドームの上に土を盛ったりしたが、駄目で、結局改築しなければならなかつた。このような時に大地震が起つた。

それは大変だと云うので私は柿岡に行ったが、あそこでは震度4位で、つぶれるどころではなく、大したこともない。しかしつぶれたから報告しろと云う。(笑声) それから奥山さんに相談したら改築の予算を出さねばならぬと云う。そうですかと云うので、全部残らずつぶれたことにして報告を作った。その翌年から改築にかかり14年に完成した。庁舎の前で岡田先生と私とで写真をとったのはその時のものである。これがたぬき親爺と云われたゆえんである。

突拍子もない命令が出て了解に苦しむことがある。大

正12年大震災の年の7月28日のこと、「富士山に登って山頂で予報をやれ」と命令された。7月30日に摂政官がお登りになると云う。私は1ヶ月位見習をしただけで予報をやったことは全然ない。とんでもないことだと云ったが、「ともかく上って予報をしろ、ここに前に観測した資料があるから、前にこうだったからこうと予報をしたらいい。電話でその観測もようを下に知らせれば、下で何とか知らせる」と云う。そこで今道さん、蔵重さんと私と3人で上り、富士山頂観測所と云う看板を下げた。ところが、電話をかけようとしたら新聞社等でふさがって電話が使えない。看板があるから人は聞きにくるし困った。そこで岡田先生から渡された野中さんから誰かの資料を見て、今日はこんな天気だから明日はいいだろうと云うので、だめだったら腹を切ればいいんだからと予報を出した。そしたら非常に良い天気で有難かつた。何も知らないで初めて予報を出し、一回出してそれが当たったんですから、まず百発百中と云うところです。(笑声) 私の予報等岡田先生は当てにしていなかったので、とにかく上って富士山頂に中央気象台臨時観測所があると云うことを殿下に見せればいいのだ。殿下は案の定お立寄りになった。その時の第一声が、「今温度は何度かね」と云われた。「何度です」と答えると、「僕の鳩知らない?」と云われた。「知りません」と云うと、「ああそう」と云われた。とにかく観測所があることを知らせることは出来た。要するに先生の目的はそこにあつたらしい。

岡田先生はネクタイを忘れることがあるが、人のネクタイがまがっていると、注意された。岡田先生の奥さんは賢夫人でゆきとどいた方だが、先生は奥さんの御存知ない間にネクタイもしめずに出て了われる。私が未だ浪人をしていた時ですが、岡田先生と藤原先生が私の家に来られたことがある。藤原先生を奏任官にして大阪出張所長にすると云う時で、私の父が関係している内国通運大阪支店の2階があいているので、そこを大阪出張所にしたい、というお話だった。2人が帰ってから、父が「お2人はえらいもんだ」と云う。「何がえらいんですか」と聞くと、「靴下を見たか? (笑声) 2人とも靴下に穴があいている、かくそうともしない。えらいもんだ。学者はあれでなければいけない。」と云う。おかげで私は父のおさがりばかり着せられた。(笑声)

私が入った大正8年には高等官は5人、台長の中村精男先生、大石先生(第2課長、統計)、岡田先生(第1課長、予報)、長谷川さん(第3課長、観測)、吉田徳一さん(第4課長、検定)、で私共が入ってから技師2名が増員、築地先生と小野澄之助先生。私の次の年に佃君が同級だが、海洋気象台に入った。私は中野君と一緒に入った。私は1年10ヶ月位技師でいた。佃君は大正9年に海洋気象台が出来た時に技師で入った。椅子がなければ技師になれない、その時にたぬき親爺の手腕がある。これも思い出してほほえましい。私を連れて農事試験場

の安藤広太郎先生のところに行き、国富君を君の方でやとってくれないかと話をした。私はびっくりした。(笑声)役に立たないから農事試験場に出されるのかと不安な顔で見ていたんだが、2人で話し合って私は転任となり書類をつくり文部省までいったらしい。その内に私にも技師の椅子がとれたら、それ以後農事試験場の農の字も出ない。(笑声)

岡田先生は海洋気象台長になって神戸に行かれ、藤原さん、小野さん、築地さん等が残った。その時に総務部が出来て、総務部長が小野さん、藤原さんと築地さんが主任でわれわれも名前をもらった。その合議制でいろんなことをきめた。その上に中村台長が居られたが、台長は何も関係がない。岡田先生が東京に来た時九段近くのお宅に伺った。その折「どうも近頃は学者が書類を持って歩きたがって困る。やたらに印ばかりつきたがる。部だの、課だのを置くからいけない。これは係の主任で沢山だ。」と云われた。そこで課長がまた係主任に逆もどりした。係主任だと簡単なんです。たとえば私が係主任をやっている、何か新しいことをやりたいと思う時には岡田先生のところに行って話をして、先生の印を貰ってあとは庶務主任の奥山さんのところに行けばそれですむ。したがってその日の中にすんで了う。私が入った大正8年頃には技手が20人、雇員が30人位、あとは定夫だから、全部で60人位。ここに課長などをおくと役づきでないものはなくなってう位だった。

先生の第1の趣味は読書で、先生は本を非常に大事にし、きちんと整理した。気象台に本が整ったのは全く先生のお蔭である。私が地震の主任に命ぜられ、中村先生が東北大学に行かれた。一夜にして地震学者を作ると先生がよく云われる。当時大森博士の地震学が唯一のもので、ほとんど統計的なものであとは震源地を決めることばかりだった。「それではいけない。エラストシティーから入るべきで、それには今良い本がある。丸善の神田支店にガリッテンとジーベルグの本があったから、他の人が買わないうちに直ぐ買って来い。お金は持っていないだろうから」と云って20円を渡された。買って来たら、「それを一週間で読め」と云う。(笑声)随分無茶な話だが、ガリッテンのをほとんど徹夜でとうとう読んだ。おかしな話ですが、その時初めて等PS線を書いた。和達先生もよく御存知だが、当時は等発震時線なども書いてなかった。とにかく大森公式一点張りだった。岡田先生は地震の本までよく読んで、地震の研究はこの方向に進まねばならぬと考えて居られた。

次のような面白いことがあった。岡田先生が風邪でもひかれて、頭痛がしてしようがないと云われた。その時、えき子さんがにがい薬を持って来て飲ませた。これは何だと聞いたら、えき子さんがその時は未だ女学校に入らない時ですが、中将湯だと云う。「中将湯を飲んでこれ以上血のめぐりが良くなったら困るじゃないか」と云っ

て先生は笑われた。奥さんが頭が痛いという直ぐ中将湯を煎じて飲んでいたらしい。そしてえき子さんが煎じる役目だったので、先生が頭が痛いといったので中将湯を飲ませたわけだ。

先生は川柳が好きで、大谷先生の領分に入るがわい談もそうとうやられた。(笑声)まああまりひどい所は大谷先生におまかせして、先生はおならの話が好きで、中でも「おまえらは何を笑うと隠居の屁」を好まれた。よく「隠居の顔が見えるようじゃないか」といわれたものだ。

われわれは昼の休みに食堂で必ず食堂会議と云うのをした。岡田さん、藤原さんは皆勤者で、私は時々さぼって和達さんなんかと野球をしたものだ。時々ガチャンと、岡田先生がストープ会議をやっている所に球を入れた。するとひどいですよ。和達さんはあやまりに行ったことは一回もない。(笑声)私は好人物なので、私が何時も奥山さんにどなられた。

食堂会議ではいろいろの話が出たが、20回30回と同じ話もする。こうして洗練されたものが測候瑣談に出ているわけだ。あいずちのうち方がまた難しい。あんまりそらぞらしくやってもいけない。話の先は百も承知なんだが、「それからどうしました」等と聞く。

われわれが入った時は、もうお酒はあまり飲まなかったわけだが、何とか先生に沢山飲ませようと、大谷さん等と一緒にその予行演習をやったりした。「先生おめずらしいじゃありませんか？」から初めて……とにかく仕末の悪い人がそろっていたからね。先生は布佐に帰るには汽車に乗らねばならないが、興に乗ってくると、「君、汽車は延ばすよ」とか云って、なかなか面白かったものだ。

あまり長くなるので、この辺で終えることにする。

日本気象学会創立75周年記念事業資金 密附者名簿(4)

12月4日から昭和32年1月12日までに御寄附を頂いた方々(到着順)は次のとおりです。なお、これをもって申込領収証に代えさせていただきます。もし掲載漏れの方がありましたら至急御連絡下さい。

56. 田辺 三郎	6口	71. 旭川測候所	15口
57. 植田 利政	6口	72. 宮崎 本弘	6口
58. 井坂 末松	6口	73. 星合 誠	11口
59. 松野満寿巳	15口	74. 清水 逸郎	11口
60. 北 勳	6口	75. 住田多三郎	6口
61. 赤井 清康	11口	76. 松平 康男	6口
62. 沖 住雄	15口	77. 柴田 淑次	15口
63. 山下 洋	11口	78. 石丸 雄吉	100口
64. 小平 吉男	11口	79. 山口三重郎	6口
65. 小島貞八郎	6口	80. 北大低温科学研究所	6口
66. 大坪 敬吉	6口		
67. 高橋 喜彦	20口	81. 倉石 六郎	11口
68. 奥田 穰	6口	82. 六車 二郎	11口
69. 松村 信男	6口	83. 阿部 安三	6口
70. 一木 茂	6口	小 計	347口
		総 計	957口